

## 市 川 巡 検

日 水 寛 子

高度経済成長期以降、大都市圏内にある市川は急速な発展を遂げてきた。しかしその反面、住宅問題・公害問題など、さまざまな問題を抱えている。それを実際にこの目で確かめ、理解を深めようと、私達は栗原尚子先生の御指導の下、初めての巡検に期待で胸を膨らましていた。

当日9時半に本八幡駅に集合し、予定経路を地図上で確かめた後、バスで行徳橋へとむかった。車内では、窓の外の風景に目を輝かせている者、地図から目を離さぬ者など、各々が巡検に異なった意味付けをしており、とても興味深く感じられた。(かくいう私は何をしていたのだろうか?)

行徳橋では先生より、これから訪問する土地での着眼点について説明された。それによると、デルタ末端の低湿地であるこの地域は、東西線開通後住宅地化が進んだが、現在でも古い要素を残しているとのことであった。

それより、徒歩で新浜・塩焼を経て、千鳥町を眺めながら新浜御猿場へとむかった。途中、住宅地が多い一方で、一部現存する蓮田や放置された土地が見うけられたりと、何とも奇妙な感じがし

たのだが、先生のお話より、これは社会的休閒現象と呼ばれるものだということがわかった。この他、江戸時代に栄えた塩業や、漁業問題、市川市合併のいきさつ、企業誘致などについて説明を受け、市川市の産業構造の概観をつかんだ。

新浜御猿場では、先生の説明をもとに、自然保護と経済開発の間における、大きな問題について考えさせられた。もっとも、炎天下にあって、大した考察もできなかったのだが。

その後行徳駅で休憩してから、西光山源心寺へとむかった。ここでは墓石がひどく傾斜・埋没しており、地盤沈下の現象が一目でわかった。由緒あるお寺も、これではその荘厳さを失うようだ。

そして、行徳野鳥観察舎で野鳥をレンズを通して観察した後、解散となった。

なにしろ限られた紙面である為、書き損じた点が多々あるが、巡検を遠足程度に思っていた私にとってその思いは見事に覆され、市川巡検は大きな意味を持ったものとなった。

(6月1日 栗原教官指導)

## 秩 父 巡 検

熊 川 真由美

式先生御指導のもと、「秩父盆地の地形」をテーマに巡検を行ったのは、秋たけなわの11月12日のことだった。まず私達は、盆地全容が見渡せる丘に登り、盆地の概要を理解した。秩父盆地は、開析の時期に入った盆地で、周辺は秩父古生層が広がり、落ち込んだ断層の中を第三期層が埋めている。北西から南東へと古いものから帯状に堆積していて、海の生物の化石が発見され、1千万年前までここは海底であった。火山灰の降った時期

と、偏西風の影響で、上位段丘の尾田蔭丘陵にはある関東ローム層が、中位、下位段丘にはない。その他盆地についての説明を受けて、市役所の方へ降りた。市役所では、各産業の現状や、人口の停滞、高齢化、盆地という条件からくる企業誘致の困難さなどの問題点を伺うことができた。午後は、安立へ行き、パミスと関東ローム層が5層ほど重なった地層の堆積を見た。初めて持つハンマーを手に縦に干割し、崩れやすい地層を少し登っ